

出題のねらい

公募制推薦・後期は、文学的文章と論理的文章、それぞれ1題ずつ出題されます。文学的文章においても、論理的文章と同様、自らの感性に任せて読むのではなく、物語の展開を正確に把握し、表現を的確に読み解くことが求められます。

㊦は、古波蔵保好『料理沖縄物語』からの出題です。琉球料理の「地豆どうふ」に関わるエッセイで、この料理を作るのに、どのくらいの手間がかかるのかが記されています。文章そのものは平易であるものの、書かれていない事柄に勝手な想像をめぐらすのではなく、書かれている事に注目し、慎重に読み解けるかどうか問われます。

㊧は、日本語学者である屋名池誠氏の著書『横書き登場—日本語表記の近代—』からの出題です。日本語の表記について、近代を中心に歴史的な観点から述べています。問題文は、本書の冒頭で、日本語の文字の並びの特徴について通言語的な観点から述べている箇所です。文字の並び方についてどのような言語がどのような並びになっているかを理解することが重要です。特に、文章内に出てくる「縦書き」がどのようなものかを図とともに理解することが読解のポイントになるでしょう。



【解答】(50点)

問一	a 献立	b 殻	c 過不足	d 造作	
	e 述懐				(2点×5)
問二	I エ	II ア	III イ	IV エ	V ウ
					(2点×5)
問三	エ				(4点)
問四	胡麻どうふは色が黒ずみ、舌にからみつく、しつっこい味と香りであるのに対して、地豆どうふは純白で、胡麻どうふよりもネッチリとしており、あぶらっこくない。				(9点)
問五	なめらかな舌ざわりと、ナマの地豆にこもるさわやかな香り。				(6点)
問六	難儀				(3点)
問七	ア				(4点)
問八	ウ				(4点)

【解説】

問一 漢字の知識を測る問題です。難しい漢字を書けるかどうかではなく、各漢字の意味を正確に理解し、熟語として適切に組み合わせられる力が求められます。aは正答が少なく、bは「殻」や「空」、cは「過」を「可」、dは「雑作」、eは「述解」とする誤答が目立ちました。これらの誤りは、漢字の意味を正確に理解せず、音や形の類似した文字を混同しているために起こります。

問二 慣用表現に対する知識、文脈に合う語句を選ぶ判断力を測る問題で、語彙力が必要です。Iをウ、IIをイ、IVをアとする誤答が目立ちました。

問三 本文をよく読み、書かれている事、書かれていない事を、適切に判別する思考力・判断力を測る問題です。アは「中国からの輸入」、イは「現代の沖縄のように十分に」、ウは「栽培しようとしなかった」がそれぞれ不適切で、本文中に言及がありません。本文には、「地豆」は沖縄でも栽培・収穫は可能であったものの、「豊富にあったとは考えられない」と記されているので、正答はエです。

問四 記述問題です。設問の要求を理解し、読み解いた内容を適切に要約する表現力を測ります。設問には、「何が、どのように異なるのか」、「両者を対比しながら、本文中の言葉を用いて」説明する、とあります。「何が、どのように」は、「胡麻どうふ」と「地豆どうふ」、それぞれの「色」「味」「香り」「舌ざわり」の4つが比較されているので、それをまとめます。

公募制推薦入試／国語(後期)

問五 記述問題です。問三と同様、設問の条件を理解し、前後の叙述を慎重に読み解く思考力、読み解いた内容を適切に要約する表現力を測ります。設問は、「地豆どうふ」の「価値」がどこにあるのかを尋ねています。設問のいう「価値」は、本文では「値打ち」と表現されており、それは「なめらかな舌ざわり」と「香り」と記されています。しかし、これだけでは、どのような「香り」なのか分かりません。続く本文に、「ナマの地豆にこもるさわやかさ」と説明されているので、ここを含めてまとめます。離れた位置にある記述も見落とさないように注意しましょう。

問六 本文の中心的な話題を把握し、文脈に合う語を選ぶ判断力を測る問題です。本文には、「地豆どうふ」の作成がいかに重労働であるかが述べられており、「婦人」はその具体例です。「婦人」が重労働に苦勞している様子を表す語で、空欄に当てはめた時、自然な表現になるのは、「難儀」です。誤答として、「得意」「熱心」「不幸」「苦行」等がありました。

問七 問三同様、本文をよく読み、書かれている事、書かれていない事を適切に判別する、思考力・判断力を測る問題です。イの「考えを変えて欲し」いは、一見、相応しいよう思えます。しかし、話題の中心は「地豆どうふ」を作る時、重労働に苦しみながらも、「決していいかげんな仕事をしなかった」婦人です。「友人」は、その苦しみを見かねて、楽をしてもらうためにミキサーを贈ったのであり、「考えを変え」るのが目的ではありません。同じ理由で、エの「電気器具にも……作れる」と「気付いて欲し」いも不適切です。ウは「嬉々として」が本文に合致しません。

問八 本文の表現、設問の選択肢を正確に読み解く思考力、本文と選択肢を比較し、適切な解答を選び取る判断力を測る問題です。選択肢の表現に注意を払い、本文の内容と表現に合致しているかどうかを慎重に検討すれば、おのずと正答に行き着くでしょう。



【解答】(50点)

問一	a 類型	b 顕著	c 抵抗	d 装置	
	e 畳				(2点×5)
問二	A ア	B ウ			(2点×2)
問三	イ、エ				(4点)
問四	(最初) 日本語の書～	(最後) もっていた			(4点)
問五	X 文字列	Y 平面 (or 画面)			(2点×2)
問六	i ア	ii イ	iii オ	iv エ	v ウ
					(2点×5)
問七	(1)図1 - 6	(2)正立像に対して垂直に文字が並ぶこと。			(2点×2)
問八	日本語は、書字方向を変えても正立像は回転しないが、ロロ文字などは、書字方向を変える際に文字が横転した形になる。				(6点)
問九	ウ				(4点)

【解説】

問一 漢字の知識を問う問題です。文脈から正しい漢字を選択するように注意しましょう。

問二 漢語の語彙の知識、文脈から正しい言葉を選択する思考力・判断力を問う問題です。Aは直前の文からどのような話題が取り上げられているかを考えます。ここでは、日本語の表記の複雑さが取り上げられています。とりわけ、漢字の訓読みを持っていることが直前に提示されていることから、漢字の読み方の多さが問題となることがわかります。この文脈に最もふさわしい選択肢は、ア「多読性」となります。Bは、該当箇所のレトリックを考えます。該当箇所の直後に「ダダ的」とあるのでこの部分を理解するのがポイントです（注に書いてあります）。「ダダ」はあらゆる社会的・芸術的伝統を否定した運動ですので、一般的な書字方向を否定するような表現になる選択肢を選ぶことになります。選択肢の中ではウ「弓」が適しているでしょう。

問三 漢字の読みの知識を問う問題です。音読みの選択肢はア「律する」ウ「転じる」オ「命じる」、訓読みの選択肢はイ「数える」オ「消える」です。漢字の音と訓の区別は国語の基本的な知識ですのでおさえておきましょう。

問四 文脈を正確に読みとり、本文中から適切な箇所を抜き出す判断力を問う問題です。「牛耕式」について述べる箇所を注視します。傍線部の後ろ、「縦書きで～」から始まる段落では、「牛耕式」が日本語に馴染まないことが述べられています。問題文で

指示されている箇所はこの段落から探すこととなります。指定の字数に合致する箇所は「日本語の書～もっていた」です。「ため」は、解答に含まないことに注意しましょう。

問五 文脈を正確に読みとり、本文中から適切な箇所を抜き出す判断力を問う問題です。X、Yともに文字の連続、書字方向について述べた箇所を理解することが必要です。ここで説明される「牛耕式」は、行を変えずにひたすら文字が連続するものであることが前文脈より理解できます。さらに、該当箇所の前段落で、行やページは「平面的には不連続だが、文字列としては連続している」という説明がなされます。問題の空欄はXに加えてYも連続しているという構成であるので、Xは行でもページでも連続している「文字列」であることがわかります。さらに、「牛耕式」では連続しているが、行やページでは連続していないものがYに入るので、「平面」が正解となります。

問六 接続表現の語彙の知識、文脈から正しい言葉を選択する思考力・判断力を問う問題です。iの前後では、牛耕式の説明から日本語と世界の言語の書字方向の話題に転換しています。そこで正解はア「さて」が入ります。iiは、iの後で説明された「世界の言語でも複数の書字方向が可能」という点が日本では事情が異なることに繋がられています。反対のことに繋がっているため、イ「しかし」が入ります。iiiの直前では、例外を除けば「同じ図形を異なる文字に当てることが文字の構成原理にはなっていないこと」が述べられ、直後では、「文字は回転させても同じ文字であることに変わらない」ことが述べられています。実際の事象によって後文を補足説明しているため、選択肢の中で繋ぐとすれば、オ「だから」が想定されます。エ「すなわち」と迷うところですが、ivでは、前文脈をまとめ言い換えているのでエ「すなわち」が最適です。よって、iiiはオ「だから」を選択することになります。vでは、前文脈の補足をしつつも後に述べられる図の説明の話題から独立しているものであるため、ウ「ちなみに」が入ります。

問七 文章の内容を正確に読みとり、文章中の言葉が指示する図を選択し、その言葉を文章中の言葉を用いながら自らの言葉で表現する判断力・思考力・表現力を問う問題です。(1)は、本文の正確な読み取りができていれば解ける問題です。(2)は、「真の縦書き」が「縦書き」とどのように異なるのかを見極め、ポイントとなる本文の言葉を使うことが重要

です。ポイントは、文字には「正立像」があること、そしてその正立像がどのように並ぶかです。上記の2つが「真の縦書き」を説明するのに必要な要素となります。

問八 文章の内容を正確に読みとり、文章中の言葉を用いながら自らの言葉で表現する思考力・表現力を問う問題です。本文中から読み取ると、日本語とロロ文字などが異なるのは「書字方向と正立像の関係」であり、日本語では「正立像」が「回転しない」がロロ文字などでは「文字も回転してしまう」ことがわかります。これらのキーワードを使用しながら指定の字数でまとめましょう。

問九 文章の内容の読み取りが正確にできているか、思考力・判断力を問う問題です。以下、正答のウ以外の不適である点を示します。ア、日本語が音韻や文法の構造は他言語に比して特殊であることは述べられていないので不適。イ、「浮遊感」については述べられていないので不適。エ、複数の書字方向が可能な文字が多いとは述べられていないので不適。